慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	朝鮮古歌謡集(孫晋泰編, 刀江書院發行)
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1929
Jtitle	史学 Vol.8, No.2 (1929. 8) ,p.150(316)- 151(317)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19290800-0151

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

文を添えられた。この未刊書はやがて日本の苑に移し植ゑられて然るべきものであつて、私はその實現の日の一日も早からんことを希念して已まぬものである。今この論文を讀むに當つて、私はその思を深められ、之が、必ずや移植實現に與つて力あるべきを信ずる者である。

本書は題言、譯者例言、譯者の作成せる原著者引用書目合せて十一頁、本文百五十二頁（菊版）の小篇ではあるが、その組方のぎつしりとつまつてゐる以上に豐富なる内容は、必ずしも讀み易いものではない。正直にいへば私如きは僅かこれだけのものを讀むに實に數日を要したのである。之は著者譯者に對して非禮を述べんとするのではない、寧ろ正に之と正反對でそゞろにその勞をおもうていふのである。

せめて中に取扱はれてゐる書名を列擧する方が寧ろ、私のなくもがなの贅言に勝るとは思ふのであるが、長くなることを恐れて敢て割愛することにした。以上。（吉田小五郎）

廣西兩宮記（田中信謹著　芸香社發行）

數日前、關西の名社西宮神社の祠宣吉井太郎氏より廣西兩宮記を贈られた。同記は享保年間、西宮の人田中信謹翁（サネモリ）が、廣田・西宮兩社に關する衆説を抄錄し且つ自己の所説を附したもので、それに南宮神社に奉齋してあつた劔珠に付いての傳説見聞を記した劔珠説が附錄せられて一卷となつて居る。一見する周捜博覽の程が窺はれる。同記に於て注目すべきは、西宮記の條に於て、蛭兒尊とエビス神とを混同しきつて居た時代に、これを峻別した神社啓蒙と神祇拾遺との兩書の所説に讃辭を呈してゐる事である。同記の初稿は享保十二年翁の二十九歳の時に成り、其後、漸次補訂を加へられ明和元年翁六十六歳の時に、今次印行の重訂本が完成して居る。

本書は從來公刊せられず、たゞ鄉黨のみに傳寫繙讀せられたが、今次吉井氏等の手によつて甲麓摘芳第一輯として印行、學界に廣く紹介せられる事となつたのは敬賀すべきである。猶ほ、同記には、吉井氏の解題、著者傳、年譜、掃苔記及び貞享地圖竝同解説が附せられて居る。

近來鄉土史の研究の進展と共に鄉土先進の埋れたる遺書、遺業を顯彰する事實が多く見受けられるに至つたのは、正に愛鄉心の發露と見るべきであり、且つこれがその涵養に多大の效あるは言を俟たない。

終に、甲麓摘芳の今後埋れた良著を逐次收めて學界に其の芳姿清香を認めらるゝ事を希望して止まない。

（昭和四、七、一、武田勝藏）

朝鮮古歌謠集（孫晉泰編　刀江書院發行）

東洋文化の研究の諸事の中には半島同胞の研究に俟つべきものが少くない。今次、孫氏は朝鮮古典文學の第一たる古歌謠が國語で譯載した本書を公刊された事は學界の爲め敬謝すべきである。朝鮮語を解し得ない自分は本書を評するのは不可能な事ではある

が本書に與へられた諸氏の激賞を否まぬ序跋文によりて本書の價値は充分に語られて居ると思ふ。次に編者の序說に依つて朝鮮古歌謠の大勢を窺つて見たい。

日本の萬葉などに該當すべき朝鮮の古い歌は俗に時調（ジチヨ）と云はれ傳存し居る數は二千數百で、可なり古い時代から作られたものらしく、朝鮮語で作られ朝鮮人の思想感情を表現した古い文學として世に誇るべき唯一のものである。こゝに古歌を一口に時調と呼ぶのも、專門的に云へば誤りで、朝鮮の古歌を民謠や俗謠以外の——傳統的概念に依つて大別すると、時調と歌（シ）になり、歌の中には長歌が凡て入り、短歌の中心も界面調に屬するものは凡て包含される。又還山別曲等の如く何々曲、何々歌、何々詞——此等は特に歌詞とも云はれる——等と立派な題名を有するもの（普通の歌には所屬の詞名や曲名はあつても題名はない）も此の歌の部類に入るべきものである。その歌詞と云はれるのは大體に普通の歌より文句が長い。歌の內容や辭句の品位高卑に依つて時調と歌とを區別するのではなく、聲調に依つて區別するのであるから、一つの歌が平調（雄深和平なもの）羽調（清壯激勵なもの）で歌はれる場合はそれが時調に屬し、界面調（哀怨憤悵なもの）で歌はれる場合は歌に屬すと云ふ理窟で、又實際にもさういふ風になつてゐる。それで朝鮮古歌を一括して時調と云ふには少なからず無理があり、便宜上古歌を一口に時調と呼んで置き（歌詞だけは時調の中に入れない）。その中に短歌と長歌とがあり、短歌が多く傳存して居る。

本書は最初に長歌を置き、次に中型歌、短歌の順で、短歌の中には又區別されて居り、その譯載量は都合五百五十八首で原歌の約四分一であるが大陸奧のものを除き、半島民衆の構想や感情を持つて謠はれたものは大部分收載せられ猶ほ附錄として還山別曲外三種を加へ、更に讀者のために作家略傳と諸王在位年表とが記載されて居る。

最後に編者の、本書上梓に至る數年間の勞苦に對しては滿腔の敬謝の意を表すると共に編者の恩師窪田空穗、朝鮮語學研究の權威前間恭作、東洋文庫の石田幹之助の諸氏が半島同胞たる編者を誘導督勵し、且つ甚大の援助敎示を與へられし事は學界の美談と稱し度い。（昭和四、七、八、武田勝藏）

史前學雜誌の發刊

今回公爵大山柏氏を中心とする史前學會より史前學雜誌が創刊さるるに至つた。

由來、學術が發展するにつれ、之が分課を生ずることは、蓋し自然の勢である。此の例にもれず、考古學の異常な發展に伴ひ、廣義な考古學の一分課である史前學を主體とした機關雜誌が生れたことは、寔に學界のため祝福すべき事柄といはなければならない。

本誌の遠大な使命抱負は、大山氏が「發刊の辭」に於て明快に述べられてゐるが、本誌は單に一部少數學者の專門的研究發表機關たるに止まらず、廣く學會の機關として、會員相互の研究促進